

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 台湾日本統治時代文学作品『蕃人ライサ』を読むー「引用」される霧社事件の時代と空間ー

A Reading on the Literary Work 'Banjin Raisa' of Japan Rule Age in Taiwan: The age and Space of 'Wushe Incident' as "Quotation"

doi:10.29714/TKJJ.200906.0002

淡江日本論叢, (19), 2009

作者/Author: 落合由治(Ochiai Yuji)

頁數/Page: 27-51

出版日期/Publication Date: 2009/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200906.0002>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



台湾日本統治時代文学作品『蕃人ライサ』を読む —「引用」される霧社事件の時代と空間—

落合由治

淡江大学日本語文学科副教授

要旨

1930年代に発表された山部歌津子『蕃人ライサ』には、いくつかの謎がある。一つは作者の山部歌津子はキリスト教関係者と見られながら、その詳細が現在までまったく知られていないこと、もう一つはこの作品が1930年10月の霧社事件直後に出版されたことから見て、霧社事件より前か、その時期に並行して書かれていた可能性がある点である。

本エッセイでは、一読者として、こうしたいくつかの疑問についてその問題のアウトラインを紹介し、作品に見られる言語的手掛かりから、作品が描いている世界の一端を紹介した。

1. 「はしがき」と作者：山部歌津子および時代背景について
2. 「生蕃記」と「蕃人ライサ」の関連性
3. 作品に見られる「引用（作者による作品外部からの参照資料）」と登場人物の性格
4. ライサの二元的世界と田中の新しい世界

キーワード：蕃人ライサ 山部歌津子 霧社事件 生蕃記 引用

1. 「はしがき」と作者：山部歌津子および時代背景について

『蕃人ライサ』「ゆまに書房の解説（下村作次郎）」¹によると、この作品は、「従来はほとんど注目されることはなかった」また、「作者の山部歌津子は文学史の上では無名である。」しかし、発表時期が霧社事件（1930年10月27日から）直後の1931年1月（奥付から）であることと、「作品の題材の来源」などから見て、「きわめてユニークな作品として注目される。」

また、『蕃人ライサ』「ゆまに書房の解説（下村作次郎）」によると、山部歌津子の経歴は、全く不明である。

手掛かりの一つは、沖野岩三郎の「はしがき」で、「山部歌津子は『闇を貫く』（1930年6月22日～9月25日東京朝日新聞連載）のヒロイン」とある。沖野岩三郎（1876-1956）は、大逆事件（1910）を扱った『宿命』で有名な和歌山県出身の牧師作家で、児童文学者としても有名である²

下村によると小説『闇を貫く』から分かることは、山部は和歌山県田辺の出身で、高等女学校時代からの希望であった新聞記者に合格し、上京した。専門学校卒の22歳、父は、山部義明、親一人子一人、在学中からキリスト教岡崎教会の会員であった。上京後は、新聞記者や婦人画報社の記者、また、神戸学院の職員だったという。

下村によると、もう一つは、沖野岩三郎の「はしがき」に出てくる井上伊之助の手紙（『台湾山地医療伝道記』新教出版社1960）に、「『蕃社の曙』をわたしども夫婦で感激のうちに読み終わりました。かえりみると東京本郷で、初めて御会いしてからもう四十五年にもなります。その間にたえずご交際を得たことは、今となってただ神の御摂理によることと感謝いたします。これを読んでいるうちに思

¹ テキストは山部歌津子（2000）「蕃人ライサ」『日本植民地文学精選集 016・台湾編 4』ゆまに書房に拠った。

² 「紀の国の先人達」

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/000200/senjin/okino.html>に紹介がある。ほるぷ『児童児童文学大系』を底本にして、今、『青空文庫』

http://www.aozoragr.jp/index_pages/person1180.htmlに作品がある。

いだしたのは「蕃人ライサ」のことです。あれは友人の岡部節子さんにわたしが材料を与えて書かせたものです。……（中略）……」とあり、「岡部節子」が本名らしいことが分かる。

もう一つの資料は、井上伊之助『台湾山地医療伝道記』新教出版社で、「年表」（P341）によれば、井上は、1882 年高知県生まれで、1899 年路傍伝道や幸徳秋水の社会主義演説を聞き、1900 年（～1908 年）上京して、東京メソジスト教会で求道を始めた。沖野は、1904 年に明治学院神学部に入學、井上は聖書学院に入學した。1905 年沖野と知り合い、以後の交友が始まった（P288）。1906 年父が花蓮ウイリー蕃地で殺害され、1909 年から蕃地伝道を志し、医学などを研修しながら、1911 年 10 月より新竹州カラパイ社に入って、1917 年まで、新竹で伝道し、一時帰国した後、再びキリスト教社会主義の加賀豊彦の援助を受けて 1922 年に台湾へ戻り、1947 年まで、台湾で伝道を続けた。霧社事件のあった 1930 年 1 月からは医師免許も取り、医療活動もおこなった。1926 年「生蕃記」、1951 年「蕃社の曙」を出版した。

また、森丑之助の紹介文が「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』P102）に載っており、1911～17 までの最初の伝道の足跡を紹介しているが、それによれば、井上は、数々の討伐戦を目撃して、心を痛め失意の内に、最後はマラリヤにかかって、台湾を離れたということである。

下村は、1926 年「生蕃記」の内容が『蕃人ライサ』に多く、使われていると指摘している。これについては、次節で検討してみたい。

沖野と井上の関係は、『蕃人ライサ』で、最後に蜂起で殺された田中の、東京で宗教学校に入っている息子胖（ゆたか）と汚職で蜂起の原因を作ったと書かれている樟脳会社主任鈴木の息子で、妹のとみ子に雑誌「戦線」を送り、社会主義活動をしている敏夫との関係と重なっているようにも見える。父を殺されて井上が伝道を志した伝記と、胖（ゆたか）が、父の死を聞いて蕃地伝道を志す設定が同じであり、また、沖野は、初期プロレタリア文学者として、雑誌『文芸戦線』とも関係が深かったと考えられる。『文芸戦線』は、プ

ロレタリア文学運動の中心となった雑誌で、大正 13 年 6 月（1924）に創刊され、昭和 7 年 7 月号（1932）まで続いた。『蕃人ライサ』では、とみ子は「創刊号からの読者」と書かれている。『蕃人ライサ』出版は、『文芸戦線』廃刊前の時期で、時期も合っている（P80）。

資料 1 作品誕生の時代背景

【プロレタリア文学の発展】プロレタリア文学の幕開きとなった「種蒔く人」は、発売禁止や作品の削除にあいながらも精力的な活動をつづけていたが、1923 年の関東大震災後の社会主義者弾圧のなかで休刊を余儀なくされ、廃刊された。そのあとを継ぐものとして翌年、「文芸戦線」が創刊され、ここに集う作家たちを中心に 1925 年には日本プロレタリア文芸連盟が結成され、初期プロレタリア文学の佳作が次々に書かれたが、運動方針の相違から組織結成の翌年には無政府主義の小川未明・壺井繁治やその他の非マルクス主義者と袂を分かち、名称も日本プロレタリア芸術連盟と改めた。しかし、これも 1927 年（昭和 2）には青野季吉・葉山嘉樹らの労農芸術家連盟（機関誌「文芸戦線」）と中野重治・鹿地亘らの日本プロレタリア芸術連盟（機関誌「戦旗」）とに分裂し、これ以後もめまぐるしく分裂や結合を繰り返して、その機関誌もさまざまであった。この間のプロレタリア文学の系統を大別すると社会民主主義系の「文芸戦線」（1924～32、1931 よりは「文戦」と改名）と、共産主義系の「戦旗」（1928～31）の 2 潮流に分けられる。

そうしたときに獄中から共産党幹部の佐野学と鍋山貞親が共同署名で「共同被告同志に告ぐる書」を發表した。共産主義からの離脱を告げるいわゆる転向声明書で、プロレタリア文学派に大きな衝撃を与え、転向するものが続出した。転向したものは反マルクス主義への完全転向から擬装転向にいたるまでさまざまであるが、治安維持法の改定強化、小林多喜二の虐殺など弾圧の激化、プロレタリア文学派の内包する問題などが相乗して、日本プロレタリア作家同盟（「戦旗」派）は、1934 年 2 月

22 日付で自ら解体声明書を出した。一方の「文戦」派もこのころには逼塞し、プロレタリア文学運動は壊滅し、転向文学がこうした背景によって書かれた。徳永の『冬枯』・高見順の『故旧忘れ得べき』・島木健作の『生活の探究』・中野重治の『第一章』『村の家』などである。

(<http://www.tabiken.com/history/doc/Q/Q148C100.HTM>)

資料 2 作品の思想的背景

①【キリスト教社会主義】キリスト教の愛と正義の倫理により共同社会を実現しようとする社会主義思想。とくに 19 世紀半ばのイギリスにて盛ん。19 世紀半ばは産業資本主義確立期にあたり、資本の自由競争と利潤追求が広汎な労働者階級の窮乏と階級闘争の激化を招いていた。国教会牧師モリスやキングスリーは 1848 年「人民のための政治」誌を発行、〈キリスト教をもって信仰から社会行動まで活動し、また社会主義をキリスト教化〉することを主張した。政治よりも宗教的人道的見地を優先し暴力や革命を否定、教育事業・協同組合活動に重点をおいた。その微温的行動は左右から攻撃され、1850 年代末には消滅。その系譜はセツルメント運動・キリスト教社会同盟などから労働党に連なっている。アメリカ・ドイツなどでも一時有力であって、マルクス主義と対立している。日本でも安部磯雄・木下尚江・賀川豊彦らはこの思想に連なる人である。

(<http://www.tabiken.com/history/doc/F/F046R200.HTM>)

②【賀川豊彦】1888～1960（明治 21～昭和 35）ノーベル平和賞候補にもあげられた大正・昭和時代の牧師、社会運動家。神戸で生まれ、4 歳で両親に死別、徳島の賀川家にひきとられ、中学時代、キリスト教に入信。神戸神学校在学中の 20 歳ごろから貧民街に住んで伝道した。徳島中学時代の宣教師、H. W. マヤスの指導でめざめ、以後、J. ウェスレー・ヘンリ＝ドラモンドらのキリスト教関係書物、トルストイ・マルクスを愛読。山室軍平よりうけた感化が彼の思考と行動の基盤となった。一時米国

に留学，帰国後は鈴木文治の友愛会に加盟，1921年（大正10）神戸市の川崎，三菱造船所の労働争議はじめ多くの労資闘争で活躍した。その後，杉山元治郎に協力を求め，農民組合運動に入った時期がある。普通選挙成立後は無産政党の結成に尽力，昭和4年にはじまった“神の国運動”の推進者として国内外を伝道行脚した。反戦論が官憲の圧迫を受け，敗戦後勅選貴族院議員。その後は日本社会党の結成，世界連邦運動などで活動。ベストセラー『死線を越えて』他150冊の著書，25冊の翻訳書がある。

(<http://www.tabiken.com/history/doc/D/D091L200.HTM>)

2. 「生蕃記」と「蕃人ライサ」の関連性

『蕃人ライサ』ゆまに書房の解説（下村作次郎）は、井上「生蕃記」と「蕃人ライサ」の関連性について、以下の点をあげている。

①「はしがき」で沖野岩三郎が書いている「生蕃記」「ミカの悪夢」は、日本人からかわいがられていた台湾人原住民が、本島人女性との結婚を望み、結局、周りの斡旋で売春婦だった本島人女性と結婚しようとし、破綻して、同族の女性と結婚したという話。これが、ライサのモデルになっていると、下村は指摘している。しかし、「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社1960）には、載っていない。再版のときに、削除されたものか。また、『台湾山地医療伝道記』新教出版社（1960）は、全体的に原住民に関する具体的記述が少なく、新版を出すときに、大幅に内容が削られたのかもしれない。

ライサの名は、シラック社の記述「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社1960）P127「ライサとその母」に見える。

②『蕃人ライサ』で最後にライサのカラバイ社のタイモ・ワタンが蜂起する動機として、土地借用の賠償金分配がなかったことがあげられている（P237～242）。これは、「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社1960）P27に出ている井上の父が殺された話と状況がよく似ている。

③『蕃人ライサ』で蜂起により殺された田中は、井上の父、伝道を決意する息子の胖は、井上という設定が同じ。

④ダニに血を吸い取られて警察から下付された牛が死んだ話（P255～258）は「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社 1960）P75～76に出ている。

⑤タイヤル人の刺青（P4～6）は「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社 1960）P169～170に出ている。また貞操観念（P134）は「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社 1960）P167に記述がある。

⑥神の立法ウットフ・ガガは、「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社 1960）P163に出ている。

⑦タイヤル語の使用

作品中にはしばしばタイヤル語が引用されている。いずれもほぼ「生蕃記」から引用されたものと見られる。

P2「ウイウイシンサンチンガイリヤスイニミタシンサン（まあ、先生、しばらくでした）」は「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社 1960）P128（まあまあ長く見ませんでした、先生）

P14 霊鳥シレック：「生蕃記」P161

P16 ピラクチヌナヌウツトウ：「生蕃記」？

P34 ヒートン サコ イニミシャウ（もし私が偽りを言うならばヒートンにかまれて死ぬ）：「生蕃記」P158

P43 ヤツカイチヌナスウットウ／「ノアイ、ヤッカイトミーヌンウットウワ」：「生蕃記」P162

P134 貞操：「生蕃記」結婚前の男の不貞が分かっても離婚 P167

P141 貞操：「生蕃記」処女を犯したものは、殺されるか賠償するか P168

P145 マタライヤスクシヤ「水に流す」：「生蕃記」P169

P171 マシヨツクトミヌンローホツケルラ「織ってしまったものですから亡くなりました」：「生蕃記」P163

ワレサコウットウニュー「とんでもない私は神様ではある

まいし」：「生蕃記」 162P

ホーゴーウットウ（七色の虹の橋）：「生蕃記」 163P

以上のように、『蕃人ライサ』が「生蕃記」の内容からタイヤル族の言語や習慣などを引用し、小説のタイヤル族の描写に活かしている点ははっきりしている。

3. 作品に見られる「引用（作者による作品外部からの参照資料）」と登場人物の性格

この作品がタイヤル族に関する当時の資料を引用して書かれていることは先に見た。以下では、「生蕃記」以外に、当時の社会的背景や何らかの引用によって書かれていると思われる部分について、あげてみた。

3.1 「カラバイ蕃創世記」（P4～P6）

これは種族の始まり、耕作の始まり、兄妹の婚姻の三つの話が一緒になっている。（パツパクワーカに、一本の大木があった。そこから石が生まれた。／～石から生まれた男と女の前に、一匹の鼠が表れ～耕作の方法を知った。／二人の間には、兄妹が生まれた。～妹は姿を変えて、兄と結ばれた。）

「生蕃記」（『台湾山地医療伝道記』新教出版社 1960）P170 には、「タイヤル族の先祖二人は兄妹で、～顔面に煤烟を塗ってその容貌をかえ、石に腰掛けて兄を待ち受けた。兄が来たって自分の妹であることを気が付かず、ついに夫婦になったというのである」とある。しかし、この話は最後の部分しかでていない。『蕃人ライサ』の作者は、他の伝説も合わせて書いている。森丑之助『台湾蕃族志』P249 以下に同じ伝説が載っているが、完全には一致しない。「パツパクワーカ」の地名や、粟の耕作の話は、どの資料から出ているのか？

また、井上は、これを「いれずみ」の起源として紹介しているが、作者は P7 で土左に「彼らの貞操観念が、羨ましいほど強いのであらう」と語らせて、タイヤル族の美德に結びつけている。解釈が違っている。

3.2 花蓮 K 料亭のお六 (P22～) と歌 (論者注 : P90 では松聲庵に勤める)

『蕃人ライサ』には当時、水商売で働いていた女性達の話しも登場している。「長崎生まれのむつ代という女で、日本人仲間では、彼女をシベリアお六と呼んでいた。／お六は、シベリア、満州あたりを流れ渡って来た、もう三十近い凄腕の売春婦 (中略) 長崎に帰ったのであるが、彼女の故郷は受け入れてくれなかった。で、渡り鳥の彼女は多少自暴自棄気味で花蓮港に来て K 料亭の女中になっていた」(P33～34／P35～36)。以上は、当時の花柳界など水商売に関わる女性達の時代背景を踏まえていると考えられる。

なお、『蕃人ライサ』にはこうした女性達の歌う宴席での歌として「わたしや心に錠前おろし錠はお前の胸にあるヒートンサコイミショウ／岩の清水は底から湧くがさまの心も底からかヒートンサコイミショウ」のように「生蕃記」P158 のタイヤル語が、合いの手に入っており、台湾で歌われていた俗曲であろうか。あるいは、作者の創作であろうか。

資料 3 【俗曲】

広い意味では雅楽以外の音楽全てをいいます。狭い意味では端唄や小唄など小編の三味線歌曲全体を指します。その中でも酒宴の席や寄席のようなところで演奏する娯楽性の濃い曲だけを俗曲ととりあえずよぶことにします。その意味での俗曲とは都々逸・二上がり新内・奴さん・深川など・・・これらにはたくさんの替え歌があります。

都々逸は「度度一」とも「殿殿奴」とも書きますが、歌のハヤシの「ドドイツ ドイドイ 浮世はサクサク」からきたと思われます。19 世紀の始め頃 名古屋 熱田神宮に近い神戸町の宿屋にいた飯盛り (私娼) のことを「おかめ」とよんでいました。この「おかめ」と遊ぶ客を冷やかして

おかめ 買う奴 頭で知れる 油つけずの二つ折り そいつはどいつじゃ そいつはどいつじゃ

とあり、これが起源といわれています。江戸の寄席で新らしい曲風で唄われ、即席の謎解きによって一層人気を集めました。二上がり新内もこの前よりありましたが、この期に大津絵その他の俗曲とともに流行しました。

待つ身になっても辛かろうけれど待たせて行かれぬ身も辛い「都々逸」より

猫じゃ猫じゃとおっしゃいますが 猫が下駄はいて 絞りの浴りの浴衣でくるものか 「猫じゃ猫じゃ」より

秋の七草 虫の音に 鳴かぬ蜩が身を焦がす 君を松虫 鳴く音も細る恋という字を 大切に「秋の七草」

三味線亀谷 <http://www.kameya.tv/hauta.html>

作品の時代となっていると考えられる 1920 年後半から 30 年頃の時代、花柳界で流行したのはこうした「俗曲」と思われる。『蕃人ライサ』の作者はこうした花柳界の女性の生い立ちや仕事内容に関しても詳しい事情を知っていたと考えられる。

『蕃人ライサ』には、同じ様な俗曲が他にも出ている。P34～35 には、「籠で行くだよ あの山越えて ホイホイ 行けば小松の花が散る ホイホイホイナ 泣きの涙で辛抱はしたがよ ホイホイ 国の母（ヤヤ）さま 気にかかる ホイ ホイ ホイナ」

これも、俗謡と思われるが、「五木の子守り歌」のような、哀愁が歌詞の中には感じられる。また、国の母に「ヤヤ」と仮名が付けてあるが、このフリガナは謎である。『日本国語大辞典』では、三重県志摩と石川、富山に母「ヤヤ」の言い方があると言うが、志摩市役所の回答では、現在ではもう廃れており、大正、昭和の郷土史にももうないので、かなり古いことばではないかという回答であった³。富山と石川は各県立図書館に問い合わせしてみたが、江戸時代には使

³ 志摩市立磯部図書館・郷土資料館では、江戸末期に台湾に漂着し、丁寧な扱いで無事に帰国した志摩の漁師の手記を復刻し、郷土史として紹介している。志摩市立磯部図書館・郷土資料館（2006）『小平次漂流記―異本とその考察』志摩市立磯部図書館・郷土資料館参照。

われていた形跡があるが、近代での使用例は見つからないとのことであった。

また、タイヤル語では、母「y a y a」、父「y a b a」と「生蕃記」181Pにある。

お六の出身が長崎というのは、「カラユキサン」に合っているが、シベリア・満州へというのなら、北陸でもおかしくはない。なぜ、こうした、書き方になるのか、謎が尽きない。

資料4 子守り歌とカラユキサン

①【五木の子守り歌】

五木の子守唄

おどま盆ぎり盆ぎり 盆から先やおらんど 盆が早よ（はよ）

来りゃ 早よもどる

おどまかんじんかんじん あん人達やよか衆 よかしゃよか帯
よか着物

おどんがうちんだちゅうて だいがにやてくりゆきや 裏の
松山 せみが鳴く

せみじゃござんせぬ 妹でござる 妹泣くなよ 気にかかる

おどんがうちんだば 道端（みちばた）いけろ 通る人ごち
花あぎゅう

花はなんの花 つんつん椿 水は天から もらい水

明日は山越え どこまで行こか 鳴くは裏山 せみばかり

「童話童謡の世界」http://www5b.biglobe.ne.jp/~pst/douyou-syouka/03nihon/ituki_k.htm

②【カラユキサンとトコジュパン】

鎖国から解放された明治以降、日本人は東南アジアに堰（せき）を切ったようにあふれ出た。これら日本人の海外渡航は貧しさの故であり、南方で成功したいという一旗組であった。あるいは結果的には棄民であったのかもしれない。

その日本人の海外渡航の先駆けとなったのはカラユキサン（語源は唐行）といわれる売春婦である。例えばある資料によ

ればジャワ島の在留邦人の断片的な数字として 1897 年（明治 30）の 125 名の内 100 名は女性である。その職業が記されていないのは書くのがはばかれるためである。

カラユキサンは主として九州の天草、島原の貧困家庭の女性であった。荷物、特に石炭船の積荷に紛れて密出航する彼女らの行き先はシンガポールである。そこから東南アジア各地に配られる。東南アジアの都会にも田舎にもカラユキサンは居た。モームの小説にも日本人の売春宿と売春婦が東南アジアの風景として描かれている。

山崎朋子著『サンダカン 8 番館』というカラユキサンを取り上げたルポタージュが知られている。マレーシアのサバ州のサンダカンは当時は北ボルネオ会社の所在する新興都市である。このボルネオ島の東端の英国領にさえ 8 番館という大きな数字の番号を掲げるほどの日本の女郎屋があり、カラユキサンが居たということである。東南アジア各地の都市では似たようなものであった。

台湾銀行のバタビア支店、スラバヤ支店の開設時はカラユキサンの故郷への仕送りで営業が成り立ったという。トコ・ジュパンはカラユキサン相手の商売から始まった。

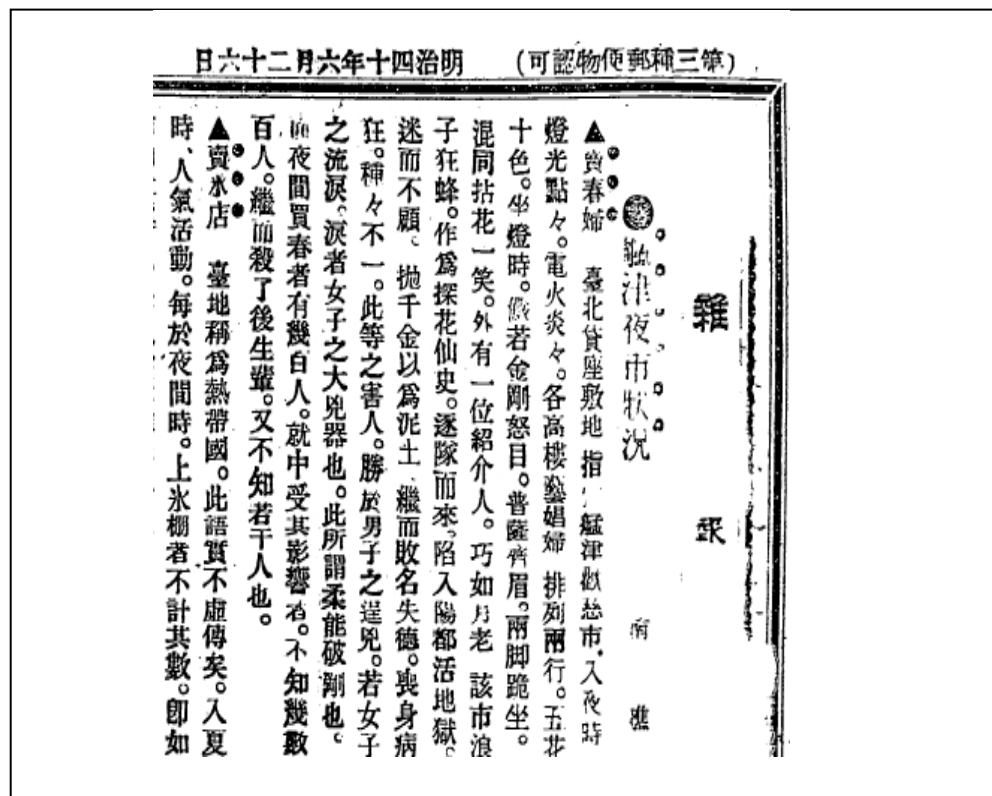
女工哀史の時代を経て勃興した日本の資本主義は今や押しも押されもしない世界有数の経済大国である。今、東南アジア全体が巨大な経済力を有する日本の商品の海に浮いているようなものである。

この日本の経済発展の基礎となったのは“女工”に表される明治時代の日本の安い労働力であった。綿製品をダンピングまがいで輸出して日本は工業社会にのし上がった。そういう意味で輸出されたのは日本女性の汗と涙である。しかし実は少女の肉体そのものも輸出されていた、それがカラユキサンである。

「インドネシア専科」<http://www.jttk.zaq.ne.jp/bachw308/page029.html#348>

当時、台湾で発行されていた新聞「台湾日日新報」でも、「売春」などに関する記事は、多い。

資料 5 日本統治時代の台北市での売春婦記事



(「台灣日日新報」漢珍ゆまに清晰版 明治40年6月26日)

志賀直哉『暗夜行路』にも、お栄が朝鮮から満州に水商売で出かけ、結局失敗して戻ってくる挿話が入っている。女性史の面から見れば、19世紀後半から20世紀前半、女性が水商売の形で海外に出稼ぎに行ったり、あるいは売買対象として売られていったりした日常的現象は、当時の女性の地位を象徴するとともに、当時の帝国主義的グローバリズムの中での女性の役割を考えさせる。

3.3 蕃童と君が代

『蕃人ライサ』には、当時の学校教育の一端も描かれている。それが蕃童と君が代の挿話である。

「生蕃記」(『台灣山地医療伝道記』新教出版社 1960) P132 には、

「三十余名の生徒が声を合わせて君が代を歌った時は、何とも言えない感に打たれ、落涙をおさえることができなかった」とある。

P72 では、お六と結婚させられそうになって逃げ出したライサに、田中が内地人の正体が分かったらいい、「心持ちの上で学ぶべき点はない（中略）信仰は変えないがいい、科学的知識だけを吸いとるべきだろう」と述べ、蕃童と君が代を皮肉って「しかし、こうして皇化あまねき筈が一步立ち入ってみると、いい事よりは悪い事の方がさきに眞似られている」と言っている。

また、田中は「君が頭目になって、文明人の頭脳と蕃人の信仰、肉体を以つてこの台湾の原始林中に君の天地を想像するんだ」と言っている。

蕃童と君が代は、P336 のタイヤル族蜂起のところで再度、取り上げられ、「例の君が代合唱も、ここの蕃童学校の生徒達が一番巧みになっていた程で、それが今、突如として反乱を勃発させようとは、誠に青天の霹靂だった」と書かれている。

こうした部分では、「生蕃記」の君が代が、かなり批判的に引用されていることが分かる。また、その後、1930 年代後半に明確に「皇民化教育」の形をとる当時の日本帝国の教育の問題点が、1930 年前からすでに自覚されていたとも言える。

3.4 樟脳会社と鈴木

P164～166 の鈴木の子供買での汚職は、「生蕃記」にはない。何かの事件が、引用されている可能性がある。

また、当時の樟脳生産であるが、1930 年 9 月には「台湾日日新報」に「獨逸ものに押されて 臺灣樟脳サツパリ それに米國の不況も 搗てて 最近取引絶無の状」の記事があり、1929 年の世界恐慌の影響が台湾の樟脳産業に大打撃を与えていたことが分かる。

資料 6 1930 年 9 月 18 日の台湾樟脳記事



(「台灣日日新報」漢珍ゆまに清晰版 昭和5年9月18日夕刊)

3.5 ラゴオビンの話

P136～140 の日本人教師に暴行されたとし、売春婦となったラゴオビンの話も、かなり具体的で、何かの事件が引用されている可能性がある。なお、ラゴオビンの名は、『生蕃記』P167 に出ている。そこでは、亭主の結婚前の浮気をとがめて離婚した貞淑な女性である。

以上のように、『蕃人ライサ』にはさまざまな当時の社会的背景や事件に関わる資料が引用されていると考えられる。「引用」による物語構成を『蕃人ライサ』の特徴の一つとして取り上げることができる。

4. ライサの二元的世界と田中の新しい世界

もう一つの『蕃人ライサ』の物語世界の特徴は、常に二項対立的

に人物と世界が描かれている点にある。

4.1 ライサと田中の世界観

まず、ライサから見ると、「この眼（とみ子）と、今夜最後に見たあのお六の眼とは、等しく内地人のしかも女性の眼でありながらなんという相違であろう。たとえ神の眼と悪魔の眼といっても、まさかこれほどまでの隔たりはないかもしれない。侮辱と信頼、(中略)、それら一切の極端に相反するものをこの二人の瞳は雄弁に物語っていた」(P66)とあり、また、「彼には異臭鼻をつく蕃社の生れ家は、なつかしいながらも、一方また伝統の重圧を感じさせずには置かない暗さがつきまとっていた。(中略)ここ(田中の部屋)には(中略)、どの調度の一つにも、どの家具の一片にも、明るい文化生活の輝かしさを思わせる希望があり喜びがあった」(P68～69)とある。ライサの視点から見たとき、その住む世界は完全に二つに割れている。一方、日本人の場合も世界は同じように二つに割れている。田中は、「内地人だろうと蕃人だろうと、いい人はいい人同志、悪い奴は悪い奴同士つきあっているほうがよさそうだよ」(P69)と善悪の二項対立を語っているが、「君たちタイヤルは、内地の子供に近い。彼等だった小さい内にこの台湾の原始林の中へつれてきて、善い意味でも悪い意味でも文化的教育なんかしなかったら、君達と同じやうな素朴な愉快な人間になるだろうよ」(P71)、「君が頭目になって、文明人の頭脳と蕃人の信仰、肉体を以つてこの台湾の原始林中に君の天地を想像するんだ」(P73)、「人間が人間にひかれ、地位や金や階級に惹かれない時代は近づいている。さういふ少女にめぐり合うまでまちたまえ」(P75)と述べ、そうした二項対立の止揚を主張している。田中の助言は、ライサの素朴な二項対立に比べれば大人の世界であり、善悪を越えた弁証法的止揚ともいえるが、清濁合わせ飲む世俗的世知とも見える。

一方、井上はタイヤル族について「生蕃記」の「蕃人研究」P159の中で、次のように述べている。

タイヤルは全能のウットウの神を信じている。首狩りは、悪習だ

が、彼らの武士道である。また、階級がなく、ひとをたたかず、狩りの獲物は分配し、偽りや盗みをしない。男女関係が厳格である。そして、「本島人や日本人が入り込んできて、めかけも来れば、醜業婦も来るという状態で、これを見なれる蕃人が自然に墮落するのはやむをえないことであります。(中略) 文明の空気か悪魔の誘惑か、着物も着る、かさもさす、下駄もはくという時、みはや彼らの頭には祖先もなく、ウットウもなくなるのではあるまいか、これはわたしの最も憂えておる処であります」と述べている。井上は、タイヤル族の美德を認めているが、文明に対してかなり受動的で簡単に影響されてしまう点を悲観的に見ている。

『蕃人ライサ』は、井上に比べると、ライサの側に主体的動きを期待しているが、作品の最初ではまだ実現は、しなかった。

4.2 ライサの成長と鈴木一家（とみ子・兄敏夫）およびお六との関係の変化

こうした素朴で脆弱な善を象徴するといえるライサは、日本人の中での善を象徴する人々との接触によって次第に成長を始める。

まず、P80 では当時の左翼運動雑誌「戦線」が出ている。ライサと田中は、とみ子の雑誌「戦線」を見つけた。ライサには分からないが、田中にはその意味がよく分かる。これは新しい思想との出会いと言える。続いて、P93 からは、山本医師の指導の下でライサが読書と実験に没頭し、医学を知ったことが書かれている。これは、文明の精神を学んだこと、近代の正の面を学んだことと考えられる。さらに、P100 からは「生蕃には生蕃としての生活を完成させるためにつくしたいのです。こうして様々の違った民族が、同じ日の丸の旗のもとに、それぞれの特殊な文化を完成することが、結局日本のためになると思います」というライサの明確な目標と決意が生まれている。その他、以下のような成長の軌跡が見られる。

P103：鈴木家を手伝い、蝶をきっかけに、とみ子と親しくなる（キリスト教的な正しい男女関係）。同時に、蝶や植物を知る（文明の精神）。

P128：お六と偶然出逢い、挨拶をする。以前の行き掛かりを捨てて和解する（清濁を合わせる態度）。

P164～166：父親・鈴木の汚職を知り、娘の美しいとみ子との対比を考える（文明社会の矛盾を乗り越える）。

P171：「善といい悪とは言うものの、立ち寄って一つ一つ手にとって裏返しに調べてみれば、善の糸、悪の糸、神の糸、悪魔の糸が、みわけもつかぬほど細かく入り組んで綾に織りなされている。／これが誠に織りなされた人生なのだ。／ライサの胸は、カラリと晴れた。」（人間文明社会の実相を認識する）

こうした精神的遍歴は、最後に「生蕃の信仰は何という深い正しいものでしょう」「そうだよ、それに気が付けば万歳だ」（P173）と兄・敏夫の話によって、自分のタイヤル族の文化の真価を認識するという深い自覚的認識をもたらした。ただ、二項対立が対立し合うのではなく、それを教育と認識の深化による成長で昇華するという点が『蕃人ライサ』の文明における二項対立問題への解答になっていると考えられる。

4.3 虫愛づる姫君・とみ子の成長

そうした二項対立を超克する人間の成長はライサばかりでなくとみ子にも顕著に見られる。『蕃人ライサ』は左翼雑誌「戦線」をだしながらも、そうした方法ではなく、別な選択をとみ子にさせている。P103には「蝶採集」の活動が描写され、また P112 には牧野富太郎博士の話題が出ている。

資料7 牧野富太郎博士

文久2年(1862年)、土佐国（現高知県）佐川村（現、佐川町）の裕福な商家に生まれ、幼少の頃から植物に興味を示していた。10歳より寺子屋、さらに塾で学びその後12歳で小学校へも入学したものの2年で中退、好きな植物採集に明け暮れる生活を送るようになる。

植物の採集、写生、観察など研究を続けながら、欧米の植物学も勉強し、当時の著名な学者の知己も得るようになる。22歳

のときには東京帝国大学（現東大）理学部植物学教室に出入りするようになり、やがて 25 歳で共同で「植物学雑誌」を創刊した。その後 26 歳でかねてから構想していた「日本植物志図篇」の刊行を自費で始めた。今でいう植物図鑑のはしりである。

27 歳で新種のヤマトグサに学名をつけ植物学雑誌に発表し、た。1890 年、28 歳の時に東京の小岩で、分類の困難なヤナギ科植物の花の標本採集中に採集する機会を得た、世界的に点々と隔離分布するムジナモの日本での発見と、そのことを自ら正式な学術論文で世界に報告したことで、世界的に名を知られるようになる。31 歳で東京大学理科大学の助手となり、その後も各地で採集しながら植物の研究を続け多数の標本や著作を残していく。ただ学歴のないことと、大学所蔵の文献使用のやり方による研究室の人々との軋轢もあり厚遇はされず、経済的にも苦しかった。

65 歳で理学博士の学位を授与され、同年に発見した新種の笹に翌年亡くなった妻の名をとって「スエコザザ」と名付けた。78 歳で研究の集大成である「牧野日本植物図鑑」を刊行、この本は改訂を重ねながら現在も販売されている。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%89%A7%E9%87%8E%E5%AF%8C%E5%A4%AA%E9%83%8E>

なお、牧野博士は 1894 年、台湾へ採集に来たことがある。こうした在野の研究者・牧野博士の活躍は、『蕃人ライサ』での登場者の成長のモデルとも言える。P114 では専門雑誌に発見が出たことが書かれ、やがて、とみ子は、専門知識のある女性に成長していく。これは、自立した女性への一歩であり、仕事の限られていた当時の女性にとって、そうした困難を乗り越える一つのモデルを提起している。同時に、自然を愛し蝶を愛するとみ子は、『堤中納言物語』の「虫愛づる姫君」とも言え、タイヤル族の自然を重視する環境に相応しいヒロインとして描かれている。

4.4 胖と敏夫の話

しかし、こうした人物の成長は、やがてより大きな二項対立の渦に翻弄されることになる。それは、まず、マルクス主義と宗教への批判として描かれる。P198～200 には、宗教（古沼と喩えられる）とマルクス主義（使い古され人を酔わせる）への批判が描かれている。

そして、同時に社会的な動きとして、P186 にはカラパイ社の不穏な動きが描かれ、霧社事件の噂が描かれている。多くの資料と当時の社会背景を踏まえて書かれている『蕃人ライサ』の書き方から言えば、霧社事件の噂には、何か出典があったのかもしれない。

また、この P188～192 の部分には、「アイヌ研究山田上東作（金田一京助）」と石川啄木の挿話が入っており、下宿先の本郷西片町・青雲館は、「赤心館」のことである。

資料 8 石川啄木の 1908 年年譜

4 月 28 日 千駄ヶ谷の新詩社にて数日滞在。

5 月 2 日 与謝野鉄幹につれられて、森鷗外の「観潮楼歌会」に出席。出席者は、他に、伊藤左千夫、北原白秋、佐々木信綱、平野万里、吉井勇等、主客あわせて 8 名。

5 月 4 日 金田一京助の友情で、本郷区菊坂 82（現文京区本郷 5-5）の赤心館に下宿。

1 か月ほどの間に、「菊池君」、「病院の窓」、「母」、「天鷲絨」、「二筋の血」、「刑余の叔父」の 6 作品、300 枚を脱稿するも、売り込みに失敗。煙草銭にこと欠き、原稿用紙、インクもなくなるほど生活に困窮する。

6 月 4 日 森鷗外に、「病院の窓」、「天鷲絨」の出版紹介を懇願する。（「病院の窓」が鷗外の尽力により春陽堂と購入契約。但し、原稿料 22 円の支払いは 8 カ月後となった。）

啄木の息 http://www.page.sannet.ne.jp/yu_iwata/nenpu1905.html

作者・山部歌津子が、こうした文化人のエピソードにかなり詳しい位置にいたことがわかる。

4.5 タイヤル族の蜂起

『蕃人ライサ』のクライマックスとも言える、タイヤル族の蜂起の経過は、以下のように描かれている。

ライサのミカとの再開（「ミカの悪夢」と同じ名前）（P226）後、蜂起の原因として以下の叙述がある。

カラバイとウライ社に樟脳採取の賠償が行なわれていたが、鈴木により半減した。鈴木は、生産量をあげるために、樟の古木の内部を削らせたため、多くの木が失われた。それに加えて、カラバイ社への賠償金が来なかった。鈴木は、ウライ社に、全額を渡してしまった。田中が、交渉して、支庁から種牛を下付してもらうことになった。その牛も、病気で死んでしまった。そして、同じ時に、楠の空洞をカラバイの少年が発見した。内地人に騙されていたことに、カラバイの老人たちは怒った。P237～242

作品での霧社事件の背景の理解は、タイヤル族の嘘を許さない精神が、蜂起の原因であるとされている。成長し若いリーダーとなったライサが上京したことによる一時的な感情の和解（P246）にも関わらず、結局、問題は解決せず、P323でのライサの負傷によるタイヤル族の怒りが爆発し、ライサが重傷を負ったことに怒ったタイヤル族の人々が、田中と鈴木婦人を殺害に至った。ライサは、ゆたかに事件を知らせ、ゆたかは伝道を決心する。

先にも見たように、『蕃人ライサ』でのタイヤル族蜂起はこの当時の台湾樟脳産業の衰退をタイヤル族の犠牲で補填しようとした日本人側の問題として描かれている。

資料 9 樟脳工業の衰退

人造に押され勝の台湾天然樟脳 苦境に立つ専売当局と痛し痒しの製脳会社

台湾の天然樟脳は米国否世界的不況の結果売行益々不振の為め本年四月台湾専売局は台湾製脳会社に対する補償金を引下げているに相変らず独逸人造樟脳は益々安値を示すので補償金

を引下げても尚お且つ十呂盤が立たずその売行たるや微々として振わずストックは益々増加する一方である、故に専売局としては今後更に値下を行わない限り独逸人造樟脳との太刀打は全然行われない結局更に値下を行わざるべからざる現状にある然るに今の補償金以下に専売局が製脳会社に引下を強い得るかと云うにそれは前後三回に互つて引下げ而も本年も引下げるので引下げを強要するまでに相当距離があるらしい、殊に専売局に本年の引下に当つても会社に対し交換条件として万大山を提供した程で製脳会社の苦しい財政もよく知っているのだから専売局としても外国市場に値高の為め引合ず補償金は右の事情で引下を強要されず進退兩難の岐路に立つたので目下川村庶務課長の上京も内地樟脳の引下が行われない限り台湾樟脳との権衡が取れないので交渉中のように伝えられているが果して之が実行は充分可能性ありとも思われず内地は内地で種々困難な事情もあるので何れに落つくか目下海のものとも山のものとも断定が出来ない一方製脳会社としても補償金引下との交渉条件で万大山は貰つたようなものの先般の霧社事件によつて何日事業に著手さるるか皆目見当つかず殊に霧社附近の脳丁は全島生産額の約四割を占めているこの第一の場所が目的立たないので会社側としても非常な苦しい立場で之以上更に補償金の引下等があつたならば到底会社も立行こう筈なく之を知る専売局としても実に苦しい現状にある。

1930 年 12 月 10「台湾日々新報」<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/sinbun/vlist/shno01.html>

以上のように、ドイツの人工樟脳と 1929 年からの世界不況のため台湾樟脳の価格が大きく下がり、また霧社事件の影響もあって保証金を切り下げざるを得なくなったのである。この当時のグローバル化した世界経済システムの大変動が高地での樟脳採取で暮らしていたタイヤル族の生活を直撃したことは間違いない。

そして、事件は霧社事件に発展していく。P351 には船の中で噂を

聞いたとして軍隊の動員の話があるが、事件の実際の時間には合わないようである。

資料 10 霧社事件

10月27日、タイヤル族のリーダーの一人モーナ・ルダオを中心とした6つの蕃社（村）1200人ほどが、霧社公学校の運動会を襲撃した。襲撃では日本人のみが狙われ、約140人が殺害された。（なお、現地の警察にはタイヤル族出身の警察官が2名いたが、彼らは襲撃には参加せずそれぞれ自決した。）

軍や警察は蜂起に参加した村々へ鎮圧を開始した。山中に立てこもるタイヤル族に対し、火器・航空機・催涙性ガス弾などの近代兵器を用いて攻撃、親日派タイヤル族（「味方蕃」と呼ばれる）を戦闘員として動員した。味方蕃の戦闘員たちに対しては敵蕃の首級と引き換えに懸賞金が支給された。この措置は理蕃政策によって禁じられてきた出草の風習を一時的に開放したような効果をもたらし、同族間での凄惨な殺し合いを助長したとされる。作戦の結果、700人ほどの抗日タイヤル族が死亡もしくは自殺、500人ほどが投降した。

1931年1月、台湾総督石塚英蔵、総務長官人見次郎、警務局長石井保、台中州知事水越幸一が引責辞任した。

1931年4月25日、投降し収容された生存者を親日派タイヤル族が襲撃し、多数が殺され、生存者は300人ほどとなった（第二霧社事件）。襲撃した親日派タイヤル族に犠牲者はいなかった。

1931年5月6日、最終的に生き残った人々は北港溪中流域の川中島（現在の清流）と呼ばれる地域に強制移住させられた。ここで生存者らは警察からの指導のもとに生活した。その後も事件参加者への警察の摘発は続き、連行されたまま行方不明になった人々も多いとされている。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9C%A7%E7%A4%BE%E4%BA%8B%E4%BB%B6>

牧師の井上は、霧社事件後の川中島を診察した（「蕃社の曙」222P）。

4.6 ライサの結末

『蕃人ライサ』の結末は、P352 でのライサ・お六・とみ子の共同生活で終わっている。『蕃人ライサ』「ゆまに書房の解説（下村作次郎）」では、井上「生蕃記」が見せた深い理解に対して、「理想主義的人道主義的」すぎると批判している。しかし、ライサは P171 で「タイヤルの信仰」を得ており、それから言えば思想上の父である田中の死後、生き残ったライサは兄となり、とみ子は妹となり、田中が愛していたお六は母となり、精神的家族を作ったとしても、決しておかしくはない。ただ、一般的には、そうした宗教的解決では小説らしくないということになるであろうか。しかし、こうした疑似家族の成立と深化の物語は近年の宮崎駿『ハウルの動く城』などでも取り上げられており、1930 年代という時代の家族像を見直す手掛かりとも言えよう。

ただ、そのためには、とみ子、お六の内面的成長が読者に納得される必要があるが、それは十分書かれているとは言えず、唐突な終わり方という印象を消すことは難しい。なお、『ハウルの動く城』では、ソフィーの成長という形で女性が中心となることで、その成長が丁寧に描かれており、注目される。

また、下村の言う「井上「生蕃記」が見せた深い理解に対して」という点には疑問がある。井上は、終始タイヤル族を受動的に見て、自身が指導者となり弱者としてのタイヤル族を救うという立場にいた。しかし、ライサの文明の習得とタイヤルの信仰の確立という井上にはまったくない視点を『蕃人ライサ』は出している。特に、タイヤルの信仰と、キリスト教信仰をだぶらせているところは、宣教師（文明）対蕃族（野蕃）という、一般の通念を完全に越えていると言えよう。これは、当時、紹介されていたような海外伝道の記録の中に何か典拠が有るであろうか。あるいは、謎に満ちた山部歌津子自身がたどり着いた結論だったのだろうか。

5. 『蕃人ライサ』の二項対立的世界

最後に、『蕃人ライサ』での二項対立を図示して、まとめとする。

①文明における二項対立

文明の混沌とした悪の世界（内地人／鈴木）



ライサの世界（善悪の二元的世界）



よい文明人の理解者（内地人／田中・鈴木夫人）

科学（山本）・蝶や植物学（とみ子）

大人の知恵（お六・田中）

タイヤルの信仰（ライサの美点）

②タイヤル族内部での二項対立

タイヤルの旧弊な習俗の世界（父）（刺青）

VS.

タイヤルの精神（ライサ）（信仰）

③現世と来世の二項対立

『蕃人ライサ』文明の闘争



（今後の物語）P353「台湾疑獄」の物語（ライサ第二部の予告および帰台した胖のキリスト教伝道）

現在では、すでに忘れられた作家・山部歌津子『蕃人ライサ』は、以上のように「引用」と「二項対立」という当時としては非常に明確な方法と構造で文明社会と非文明社会の接触と葛藤を描き出しており、21世紀のグローバリズムの観点から再把握する価値を秘めているといえる。

テキスト

山部歌津子（2000）「蕃人ライサ」『日本植民地文学精選集 016・台湾編 4』ゆまに書房

本稿は東呉大学・第六次領台植民地時代読書会 2005 年 6 月 11 日『蛮人ライサ』での発表内容を加筆訂正したものである。